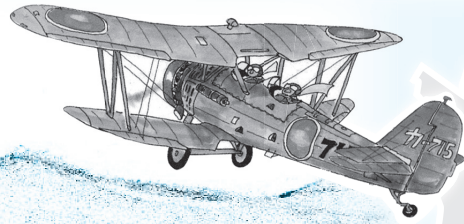
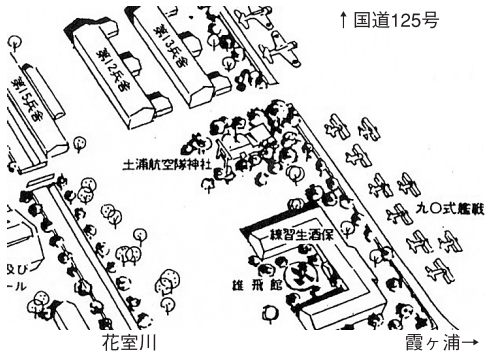


# 予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関する資料や写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。



▲土浦航空隊神社と雄飛館（『阿見と予科練』より）

日中はまだまだセミもにぎやかな残暑厳しいころですが、日が落ちて静かに夜の帳（とぼり）がおりるころ、耳を澄ますとコロコロと虫の音が聞こえてきます。平安時代の貴族は「虫聴き（むしきき）」といって、虫の音を楽しみながらおしゃべりをしたりお酒を楽しんだりしました。また江戸時代には、人々は連れ立って虫聴きの名所へお弁当やお酒を持って出かけ、自然のコンサートを楽しんだといえます。虫の音は、ゆっくりと変わりゆく季節とともに、日本人の繊細な感受性も教えてくれるようです。今月は、土浦海軍航空隊にあった神社についてご紹介します。

## ●守られた土空の遺産

土浦市烏山の細い道の傍らに、二つの小さな石の祠（ほこら）と並んで簡素なつくりの社が建っています。道端に何気なく建っているようなこの社が、実は62年前の終戦の日まで、土浦海軍航空隊（土空・現在の武器学校一帯）でパイロットを目指して訓練に励む予科練生（海軍飛行予科練習生）の苦楽を見守ってきた土浦航空隊神社であったと知る人は多くありません。

土浦航空隊神社は、もともと土浦海軍航空隊の隊内にあり、昭和5（1930）年に横須賀海軍航空隊（神奈川県横須賀市）にて予科練教育が始まったところからの殉職者をまつっていたとも、天照大神をまつっていたともいわれています。境内には名パイロットとして知られた南郷少佐（1938年戦死）の銅像が建てられ、予科練生たちは

毎月15日に神社に礼拝することになっていました。

神社の隣には予科練生のくつろぎの場所、雄飛館（ゆひかん）がありました。雄飛館は木造二階建ての建物で、一階がうどんやおしるこ、お菓子などを販売する酒保（売店）で、二階には真新しい畳敷きの大広間がありました。図書室にはたくさんのお蔵書があり、『電気蓄音器』で畳に寝そべって音楽を聴くこともできました。土浦航空隊神社と雄飛館は、厳しい隊内で予科練生がくつろげる数少ない場所でした。

終戦間近の昭和20（1945）年6月10日、土空はB29の空襲により大きな被害を受けましたが、神社と隣の雄飛館は奇跡的に残りました。終戦をむかえたのもつかの間、雄飛館は原因不明の大火により炎上、同時に神社も焼失したと伝えられてきました。

しかし、実際は雄飛館の管理人をしていた横田長三郎さんが、終戦で米軍が進駐してきた際神社が危機にさらされることを心配して、時の土空司令藤吉直四郎の了解を得て、馬車に乗せ土浦市烏山に



▲当時の土浦航空隊神社



▲現在の土浦航空隊神社（土浦市烏山）

運んでいたのです。現在は、長三郎さんの孫の横田利男さんと奥さんによって大切に管理されています。あるとき、横田ご夫妻の元に元予科練生と名乗る人が訪ねてきました。社を見せると、「ああこれだ。私はこの神社で、霞ヶ浦を見ながら故郷の母を思い出し、「かあちゃん」といつては一人泣いていた。」と感慨深く話してくれたのだそうです。土空には、終戦までに数万人の予科練生が入隊しました。その少年たちの悲喜こもごもを見守り、激動の昭和史をくぐりぬけた土浦航空隊神社は、横田さん夫妻に手厚く守られながら、今は静かに虫の音聞こえる竹やぶの中にたたずんでいます。